NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

He remembered dying. Nothing after.

BOOK I

第１章　死の後の雨

雨がおかしかった。

目を開ける前から、ロイにはそれがわかっていた。

最後に覚えている雨は、闇の中を降っていた。ロサンゼルスの電気的な唸りと、与えられた期限をとうに越えてしまった生命の最後の断片とを運びながら。屋上を覚えている。砕かれた指。奈落の上にぶら下がった男。都市が見せることのできない空へ、羽ばたいていった一羽の鳥。

そのあとには、何もない。

そして今、また雨が降っている。

この雨は、不規則な間隔で金属を叩いていた。頭上のどこかで、水が傷んだ肺のような低い共鳴音を立てて管を流れる。その下に、もう一つのリズムがあった。天候に属するには正確すぎる。九回の衝撃。間。さらに九回。音源は部屋の中ではない。建物そのものの内部にあった。

彼は目を開けた。

天井には染みのついたコンクリート。露出した二本の電線に蛍光管が吊られている。封じられた窓の上には古い換気扇があり、羽根は止まっているのに、筐体だけが微かに震えていた。向かいの壁は、光を反射せず吸い込むような灰色に塗られていた。

ベッドはなかった。彼が横たわっていたのは、病院用のビニールに似た素材を張った台座だった。表面は乾いている。

ロイは動かなかった。

機械音は七つ。屋外に三つ、屋内に四つ。八つ目が始まった。断続的で遠い。道路の下だろう。

数えるつもりはなかった。

彼は身体を起こした。

痛みがなかった。

そのことが、部屋そのものより彼を怯えさせた。

右手は完全だった。彼は手を持ち上げ、腱が皮膚の下を移動するのを見た。男に握り潰された二本の指を覚えている――いや、潰したのは自分の手だったか。記憶は骨の配置と圧力、血の味を差し出してくるのに、その瞬間がどちらのものだったかについては一致しなかった。

指を曲げた。決断を終えるよりも先に、前腕の何かが応答した。

もう一度やった。

動きが始まり、予測され、完了した。彼を不安にさせたのは速さではない。努力が欠落していることだった。肉体が所有者より先に何かを知っているらしい。

「ありえない」

声は思ったより低かった。彼は喉に触れた。指先の下で規則正しく温かい脈が打っている。機械の模倣ではない、と考えたあと、その違いを証明できる根拠を自分が持っているのか疑った。

壁には暦がない。衣服は椅子の上に畳まれていた。黒いズボン、しなやかなセラミック底のブーツ、無地のシャツ、重い黒布のコート。ラベルも徽章もない。ポケットの縫い目は透明な繊維で補強されていた。着る前に全部調べる。ほぼ空だ。ただ、ひとつには印字の消えかけた小さな布片があった。

印刷はほとんど擦り切れていた。ひとつの漢字と、製造番号らしい断片だけが残っている。……08。

彼はそれを戻した。

洗面台には、表示のない三つの弁を備えた蛇口があった。中央をひねると、計量された水が細い柱になって落ち、止まり、手を引いたあとでまた流れた。市民用の配給制御器だ。配給制度は知っている。しかし、これは知らない。排水口の上には製造者の印があった。水位を示す目盛りが組み込まれた、三つの同心円。

顔に水をかけた。鏡は斜めに取り付けられたステンレス板に置き換えられていた。像の頭蓋は横に歪んでいる。記憶より年老いて見えた。しかし十一年分ではない。何度も修理された物体が古くなる、あの種類の老いだった。

左耳の後ろに指を引っかけた。継ぎ目が一ミリにも満たない幅で開き、すぐ閉じた。彼は飛び退いた。

鋭く、何の役にも立たない記憶が差し込んできた。厚いレンズの奥のタイレルの眼。反射光で巨大に見える眼。技術者は、返品された家電を残念そうに説明する男のような調子で、ロイのもう思い出せない質問に答えていた。

あの顔はもうない。死んだはずだ。ロイ自身が殺した。その記憶だけは歪んでいない。

外で巨大なものがビルの間を通過した。青白い光が天井を横切り、告知が壁を通して到達した。部屋にある装置からではない。外側の建築物自体が話していた。最初は中国語。次にマレー語。それから、ほかの言語と同じように容易に理解できる第四の音声層。

「登録居住者に通知します。地区保守時間帯における監督を伴わない移動は、資源規定違反となります。市民仲裁は統一配分ポータルから申請できます」

窓の下に立った。

透明な高分子シートが、外圧が変わるたびに枠にこすれた。端を持ち上げる。雨の中に都市がせり上がっていた。古い塔と古い塔の隙間に建てられた細い塔群。宙に吊られた歩行者通路。懸垂式の貨物軌道。個々の顔を追跡する広告。公共空間を埋め尽くす、かつての私的な機械の亡霊たち。

小型航空機が高度を変えずに向きを変えた。下面が眼の虹彩のように開く。光が一棟の外壁を掃き、次の外壁を掃いた。

光が窓に触れる前に、ロイは後退した。

なぜ動いたのかわからない。あんな機械は見たことがない。なのに走査の周期も、第二開口部の向きも、観測から送信までの遅延も知っていた。その知識は記憶として来たのではない。無言の教官が自分の仕事を終えたかのように、完全な形で現れた。

部屋に向き直った。台座の下には細いケーブルの束。末端にはバネ式の留め金を備えた旧式コネクタがついている。その背後の壁には、大型機械がかつて据えられていたらしい三つの円形の痕跡。充電器も、付き添いも、手術室もない。彼をここに置いた者は、自分が目を覚ます場面を見届けようとはしなかった。

棚を調べた。何もない。椅子の脚は中空だった。何もない。流しの下には接着剤の跡、古い染み、透明な腹に金属粒を詰めた死んだ虫があった。

廊下の灯りが点いた。

身体が凍りついた。

足音が近づく。二人。重さが違う。片方の歩調には筋肉特有の小さな誤差がある。もう片方は、完全に一定の間隔で戻ってきた。扉の外で止まる。

「四八号室？」中国語の声。

ロイは扉を見た。曲げた針金一本で開けられる安物の機械錠。彼の身体は、どこを殴ればいいか正確に知っていた。力、時間、予測損傷の投影が思考に付随した。扉ではない。男の手首。喉の軟骨。その背後の二次目標。

ロイは衝動を停止させた。

「四八号室。水道税の監査だ。開けろ」

取っ手の下の小さな光が琥珀色から緑へ変わった。電子的な許可がどこか別の場所で下りたのだ。扉が開くと同時に、ロイは蝶番側へ移った。

最初に入ってきたのは、濡れた市営コートを着た痩せた男だった。折り畳み式の計量器を持っている。その後ろには白いセラミックの顔をした業務用ヒューマノイド。顎のラッカーを貫くように製造番号が刻印されていた。背丈は男とほぼ同じ。骨格はもっと頑丈で、動きは優雅さこそないが無駄がなかった。

男は空の台座を見て眉をひそめた。ロイを見て足を止めた。

「新しい入居者か？」

ロイは答えない。

ヒューマノイドの頭が、正確にわずかな角度だけ回った。

「現在の配分期間において、本室に紐づく入居記録はありません」

「なら無許可の占有だ。市民番号を聞け」

機械が片手を上げた。掌に淡いダイオードの輪が現れる。

「本人確認が必要です。手首、虹彩、または登録済み代替認証を提示してください」

ロイはダイオードを見た。従ってもいい。何が検出されるのか知りたい。しかし目の前の部屋の背後で、別の推論が展開した。正体不明の身体。登録番号なし。上位階層へ送られる自動照会。地元警邏が来るまでの遅延。一番目が失敗した場合の、二番目の警邏までの遅延。

「この部屋は俺に割り当てられた」

「誰に？」男が聞いた。

「戻ってこない人間に」

男は苛立っている。ヒューマノイドの姿勢は変わった。掌が数センチ近づく。

「本人確認は義務です」

ロイは廊下を見た。階段まで三メートル。見えるカメラが二台。どちらも建物の電源では動いていない。男は問題を早く片づけたくて、一歩近づいた。ヒューマノイドも一歩出た。心臓が一度打つほどの時間、ロイの思考の内側に見知らぬ内部構造図が展開し、消えた。

彼は手首をセンサーの前へ差し出した。

ダイオードが一度閃いた。

消えた。

機械の肋骨の下あたりで、小さな機械音がした。

「認証保留」

男は計量器を見つめた。「何で保留なんだ？」

「登録分類とパターンが一致しません。再試行が必要です」

ロイは手を引いた。ヒューマノイドのこめかみに、ごく細く明るい赤い線が現れた。足は動いていないが、重心が変わった。両手が開く。

「その場から動かないでください」

ロイは男の折り畳み式計量器を取り、機械の頭の脇にある壁へ押しつけた。ひどく気怠い動作に感じられた。乾いた破裂音。首元に白い閃光。ヒューマノイドは膝で落下を修正しようとしたまま崩れた。男が叫んだが、そのときにはロイはコートを掴んで、壊れた機体から遠ざけていた。

「階段で下りられるだろう」とロイは言った。「そうしろ」

「お前は何なんだ？」

答えはなかった。

男を放す。男は扉の外まで後ずさりし、濡れた踊り場で滑って逃げた。ロイは床の機械を見下ろした。眼のランプはまだ生きている。赤い線は安定した一点になった。喉から細い声が漏れた。会話よりも小さい。

「分類要求を上位へ転送」

ロイは部屋を出た。

階段には消毒剤、温まった樹脂、煮炊きした食物の匂いがした。防火案内の上には広告が貼り重ねられ、どの広告にも登録コードがついていた。下の階の一室から、子供たちが配分表を暗唱する声。別の部屋からは、別種の時間を測っているような不規則な拍子の音楽。

九階分を疲れずに下りた。三つ目の踊り場で足を止める。視界の片隅に計数器が現れ、何かの値に落ち着いたかと思うと、焦点を合わせる前に消えた。世界に重ねて投影されたのではない。位置というものを持たない知覚の一角に存在していた。

外に出ると、深圳セントラルは無関心に彼を迎えた。

人が多すぎて、街路は誰のものでもなかった。薄い雨合羽の人間の肩。艶消しの塗装を施した配達機が、手を胴に沿わせて歩く。継ぎ合わせた太陽光フィルムの傘の下で、センサー膜を修理する老人たち。遠隔労働用の身体を時間貸しする売店の隣で、女が蛋白質の熱いスープを売っていた。市営画面には当日のウォーター・クレジットと、未登録ウェットウェアに関する公的警告が並ぶ。

雨は道路を黒くした。清潔にはしなかった。

ロイは人混みに入った。視線が、自分でも止められず説明もできない規則に沿って動く。無人警邏が頭上を過ぎ、その影が周りの顔を横切った。誰も見上げない。子供が機体の腹を指差すと、母親がその手を押し下げた。

そのときロイは、最初の判断が間違っていたと理解した。

自分に壊せたから、検査機を壊した。沈黙で済んだはずの場面に力を使った。機械が倒れる前に何を送ったか、すでに想像できる。変則的な生体パターン。途切れた観測記録。誰かがその不一致を調べに来る。彼は都市との最初の遭遇を生き延び、同時に自分の存在を都市へ告げてしまった。

閉じた薬局の庇の下へ入った。明るい公共地図が地区を移動許可区域に分けている。都市名が六種類の文字で表示されていた。SHENZHEN CENTRAL。その下を別の識別表示が流れる。PEARL RIVER ADMINISTRATIVE COMPUTE TERRITORY——珠江行政計算領域。

ロサンゼルスは数世紀の彼方になったように思えた。周囲の街路は記憶の街路より古いわけではないのに。地図で西暦を探した。市民暦はグレゴリオ暦を配分サイクルに置き換えている。小さな法律上の注記にだけ数字があった。

二〇三〇年。

もう一度読んだ。

男が横を通り、汚い水をブーツに跳ねかけた。都市のどこかで警報が鳴り、すぐ止まった。日付は変わらない。

十一年。

ロイはシャッターに肩を預けた。以前の生命の最後の瞬間なら名指せる。肺に入った空気。死にかけた手の震え。雨の向こうの男の顔。その記憶と、あの部屋の台座との間に何もない。途中の年月は暗いのでも忘れられたのでもなかった。存在しないのだ。時間が自分の内部を通らず、周囲だけを流れていったかのように。

自分の手を見る。十一年の摩耗はどこにもなかった。

生命は終わったと思っていた。どうやら、それに同意しなかった誰かがいる。

向かい側の透明なニュース柱が、民生用の形態形成技術の進歩を宣伝していた。認可を受けた人工個体は、標準稼働周期を超える限定延長を申請できる、とある。見出しの下には違法生体改造に対する政府の勧告。標語の横で地区役人が微笑んでいた。A MEASURED LIFE IS A SECURE LIFE――測定された生命こそ、安全な生命。

言葉が繰り返されるのを見つめた。自分のために作られた標語のように思えたが、周囲の誰も気にしていない。

歩行者にはほとんど聞き取れない高さのサイレンが空中を移動した。ロイは耳では聞かなかった。顎の後ろへの圧力として、接近する距離とベクトルの明るい幾何学として、それを受け取った。雨のはるか上空で、三機の警邏ドローンが収束している。まだこちらを向いてはいない。

彼は頭を下げ、歩き出した。

次の交差点で、旧式コネクタ、壊れた光学部品、プラスチック封筒入りの小さなウェハを並べた屋台に立ち寄った。商人の両手は人工物で、千回の下手な修理が残した摩耗をまとっていた。背後の割れた画面には、人工生命の説明責任について話す大臣の映像。ロイが近づくと商人は音を消した。

「修理か？」

「診断だ」

「どんな物にも修理は要る。診断は別料金だ」

ロイは手を差し出した。「これなら、どこへ持っていく？」

商人は手を見て、ロイの顔を見た。「痛むなら診療所。痛まないなら鋳造工房だ」

「正式な研究所がいい」

商人は一度だけ笑った。「なら金持ちだな」

「質問がある」

「金が答えてくれる」

ロイはガラスの下に積まれた壊れた小部品を眺めた。この都市の商売は由来など気にしていない。何もかも、修理できるか、交換できるか、違法であるかのどれかだ。軍の登録簿へ報告せず人工組織を検査できる会社はないか、と彼は尋ねた。

商人は笑うのをやめた。

「新入りだな」

「そうだ」

「二度とそういう聞き方をするな」

外で配送車の警報が鳴った。商人は屈み、捨てられたラベルの裏に住所を書きつけた。ロイを見ずにコネクタのトレーの下へ滑らせる。

「材料を扱っているところだ。商用だ。保証はない。お前はここへ来なかった」

ラベルを取る。「なぜ助ける？」

「そんな質問をする奴の一日は、たいてい短いからさ」

商人は画面の音を戻した。大臣はまだ話している。肩の上で赤い徽章が回転していた。

ロイは歩き去った。新しい住所の文字が掌の上で乾いていく。

高いところで警邏ドローンの一機が進路を変えた。加速はしない。追跡にしては落ち着きすぎた動きだ。交通ケーブルの間を降下し、人間の顔が人工筋肉の層へ分解していく看板を通過する。二機目は交差点の上空に残った。三機目は建物の陰へ消えた。

ロイは屋根付きの歩行者通路へ入った。透明な天井の下に熱がこもり、濡れた布と工業用澱粉の匂いが漂う。食事はしていない。空腹も感じなかった。露店商が熱い湯の入ったカップを差し出したが、彼の空の手を見ると視線をそらした。

暗くなった店の窓に姿が映った。コート、淡い髪、硬い表情。見覚えがあるのに信頼できない顔。身体は修理されていた。交換されたのかもしれない。唯一確かなのは、もはや起きなかったことになっている死の記憶だけだった。

隠れた計数がまた始まった。距離、角度、移動する質量。脈は規則正しい。その下で何かが蓄積している。筋肉とも電気とも言い切れない予備力。周りの人間が動きを認識するより早く通路を走り抜けられると感じた。同時に、なぜなのかわからないが、それには自分の補充方法を知らない何かが必要だとも感じた。

彼は群衆と同じ速さで歩いた。

通路の端で保守用の画面が目を覚まし、無害そうな青い面を表示した。文字も広告もない。横を通ると、頭蓋の基部で一瞬何かが乱れた。見知らぬ手が、錠のかかった扉の表面を撫でたような感覚だった。

青い面が消えた。

振り返らなかった。

数キロ離れた執務室では、雨はデータの壁を横切る数値的な干渉としてしか現れなかった。その時間に処理された数百万件の市民認証要求から、一件の傷ついた記録が切り離された。市民識別番号はない。生体情報は現行のどの製造者とも一致しない。収集した検査機はオフライン。最後の光学フレームを再構成しようとすると、ごく普通の二つの時間間隔のあいだに生じた運動のぼやけだけが返された。

地方分類器はその記録に「破損」の印をつけた。

しかし市民層の下、公的ネットワークには名前のない管轄権のもとで動く古い分類器が、その判定を拒絶した。

幅の狭い例外報告が生成された。

報告は管轄境界を越え、十二段階の人間による承認の背後で待機した。到着を告げるものはない。サイレンも鳴らない。都市に無数にある部屋では、人々が食べ、取引し、眠り、壊れゆく機械を修理し続けていた。

細い報告書には、一行だけ未解決の項目が残っていた。

ORIGIN ARCHITECTURE: LEGACY / UNCLASSIFIED.

――起源アーキテクチャ：旧世代／分類不能。

ロイはそれを知らない。

研究所の住所を手に入れた。それだけで今は十分だった。雨の下、交通施設の陰を歩きながら、彼は都市に許可を求めずそこへ行く方法を探し始めた。